



霧島連山の新燃岳の活動が続いています

新燃岳では今3月25日の午前7時35分、爆発的噴火が再び発生し、噴煙が3200メートル上空に到達しました。この噴火では大きな岩が火口の外へ飛び出した事も確認されています。この噴火に伴って火口縁から西側へ、小規模な火砕流が発生している事もわかりました。幸い火砕流の方向には民家は無く、現在は被害は出ておりません。

新燃岳では、今後、大量の雨が降った場合の土石流への警戒が必要となりそうです。

東京都が大規模な公共施設の耐震強度情報を公開しました

東京都は29日、1981年以前の旧耐震基準で建てられた大規模な建物などの耐震診断結果と施設名を初めて公表しました。震度6強以上で倒壊の危険性が高いとされたのは156棟、倒壊の危険性があるのは95棟となっています。

危険性が高いのは日本大学医学部附属板橋病院（板橋区）やニュー新橋ビル（港区）、銀座貿易ビル（中央区）、科学技術館K棟（千代田区）などである事が公表されています。これらの情報は以下の「東京耐震ポータルサイト」で確認する事ができます。

<http://www.taishin.metro.tokyo.jp/>

さらに今回の調査では、(1)病院や店舗など不特定多数の人物が利用する施設、(2)特定緊急輸送道路の沿道に存在し、高さが道路幅の半分以上の建造物にカテゴリーを分割して実施し、安全性を1～3の3段階で評価しているのが特徴です。

(1)のカテゴリーでは、耐震性が最低ランクの1に相当する建物は17棟で、具体的には、紀伊國屋書店・新宿店が入居する「紀伊國屋ビル」(新宿区)などが該当しています。ファッションビル「SHIBUYA109」が入居する「道玄坂共同ビル」(渋谷区)も耐震性は最低ランクと評価されましたが、2019年度に耐震工事を行うそうです。このほか、アパレル専門店の「アブアブ赤札堂上野店」(台東区)などの耐震性が最低ランクと評価されました。

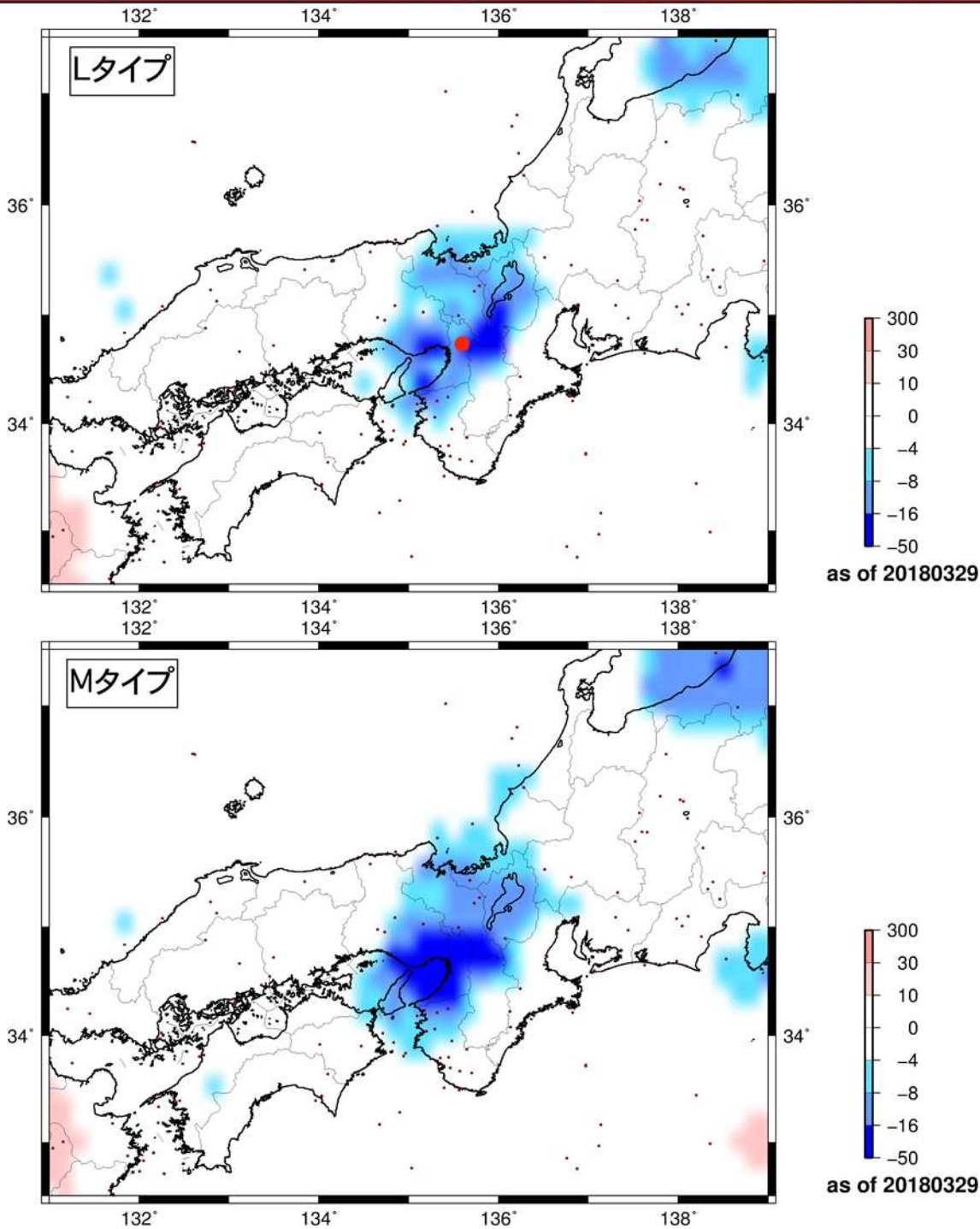
中部・近畿・中国・四国地方の地下天気図®

2月26日のニュースレターに引き続き、3月29日時点の2種類の地下天気図解析(LタイプとMタイプ)をお示しします。2つのアルゴリズムで同時に異常が確認され、数ヶ月以上の期間続く場合は、「異常はみかけのものでなく、本物の地震活動静穏化異常である可能性が高い」と判断してよいと考えています。また今週は久しぶりに「時系列変化」というグラフをお示しします。

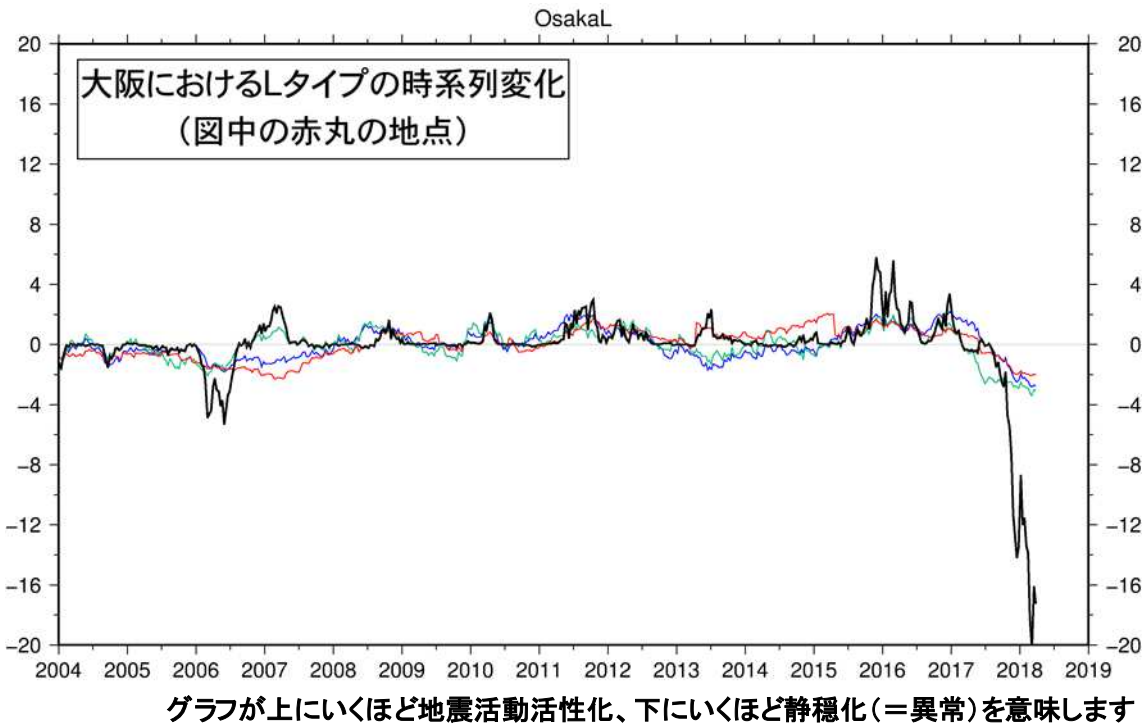
この時系列グラフの見方は、

http://www.sems-tokaiuniv.jp/DuMA/Tenkizu_Mikata2.pdf

に掲載しておりますが、今回は最も重要なスライドのみ再掲します。



上に示しますように、LタイプでもMタイプでも近畿地方に顕著に青い静穏化領域が広がっている事がわかります。次のページの図は上のLタイプにおける大阪（北緯34.7度、東経135.5度、位置としては大阪駅付近、●で示した地点）のRTL変化曲線です。ここ15年ほどで初めてと言える顕著な地震活動静穏化を示している事がわかります。まだ静穏化が回復していませんので、経験則から言えば、地震発生はまだ先という事になります。



次の模式図が典型的な RTL/RTM 曲線の時間変化のパターンです。経験的には異常が回復してから地震発生となるケースが多い事が分かっています。

地下天気図の時系列とは？

- ある地点(たとえば東京, 京都, 名古屋など)における地震活動の静穏化や活発化の推移を表現したものです

